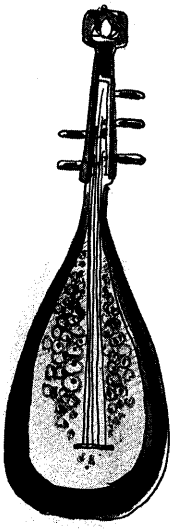
土器の復元

吉岡　恭平



部屋には幾つもの長机が並べてあり、それらの上には縄文土器の破片が隅々まで広げられている。机の間を整理箱を抱えた女性達が行ったり来たりしている。整理箱には彼女達に集められた同一個体の土器片が入っている。

誰かが「やったあ。ついたついた。今日十点めよ」と歓声をあげる。別の一人は壁際の棚に並んだ整理箱を次々に引き出しては「この辺にこの土器があったはずなのに」とぶつぶつ言っている。「あら、この土器はあっちの棚よ」と人が捜している土器に首を突っ込む人がいる。

これは私がいる遺物整理室での土器接合作業のひとこまである。遺物整理の中で最も楽しくおもしろくできるのがこの接合と次の復元の作業である。私も皆の歓声に釣られて本務そっちのけで熱中してしまう始末である。

土器の形状（プロポーション）、赤っぽいとか黒っぽいとかの色具合、縄目文様や幾何学文様の種類などを手掛かりに同一個体を集め、割れ口の形状や文様の連続性から接合する箇所を捜索するのである。割れの形状に沿ってピタッと接合した時の満足感はジグソーパズルの比ではない。特に人が半ば諦めた土器に挑戦し接合した時の気分は格別のものである。

この接合のおもしろみを覚えると土器を記憶する容量が増大するようで、主要な土器をほとんど（百個体ほど）記憶してしまう人が何人もいるようである。

発掘調査は野外調査が終了すればそれでおしまいと思っている人が多いようであるが、実はそうではなく、次に室内での遺物整理が待ち受けているのである。

その行程は土器の場合でみると、水洗い→注記（出土地点などを土器片の裏に書く）→接合→復元→実測（土器の立面図を取る）→写真撮影→報告書刊行となる。

接合の次に来る行程が復元である。この作業もおもしろいのであるが、なかなか侮れない。土器の残り具合によって正立させたり倒立させたりして組み立てて行く。接着剤は普通のセメダインである。組み立て可能な土器とはいえ隙間だらけでアクロバチックに接合しなければならないことが多い。

復元に使う道具はいろいろである。骨折した時に使うギプス用のキャスト材（細かい格子状のもの）、これを隙間を埋めるための芯材とし、それにシャモット（耐火レンガの材料の粉）とエポキシ系樹脂を混ぜ粘土状にしたものを充塡して補強して行くのである。（私の所では石膏よりも取り扱いが楽であるのでこの方法が定着したが、全国的には石膏が主流であろう。）

復元の行程には段階が二つ存在する。ひとつめは実測図を取り易いようにするための復元である。こ

の場合は必要最小限の復元であり、完形品にはしないことがポイントである。それは実測図を取るという行程が土器を最もよく観察しなければならない行程だからである。前述したように組み立てられた土器はいたる所に欠落箇所が存在する。私たちは実測する際にその隙間から内部を覗きこんだり、ルーペで土器の表面や断面を観察して、胎土の状況や成形時の粘土紐の状態、器面の調整の方法、縄文の種類、文様の施文方法・順序、煮こぼれの痕跡、などの様々な情報を引き出すのである。したがって過度の復元はむしろ土器観察の妨げになるのである。とくに壺などは完形にしてしまうと内部の観察が全く不可能になる。

ふたつめは展示などのために見栄えを良くする段階である。博物館に展示された土器を完形品と思って見ていたら実は数点の土器片から大復元をしたものだったということがたまにある。

このような復元の方法に私は疑問を感じている。彩色する場合でもどこまでが本物であり、どこからが復元であるか、はっきりと判るようにすべきであろう。欠落部分の復元はあくまでも担当者のその土器に対する理解にもとづくものであるからこそ、見る側がそのことを認識し観察できることが望ましいと考えるからである。

土器の復元は、あくまで元の土器の状態に近づけた形でいろいろな情報を収集しようとするものである。「なおそう」としても、「なおせない」「なおし」ともいえようか。ただし、製作され、不要になって廃棄されたという「土器の一生」を垣間見ることができるのである。

（仙台市教育委員会）